

# 「史記」における時間表現について

君島 淳

## 一 はじめに

本稿では「史記」における時間表現について取り扱う。

周知の通り、中国の正史の筆頭に数えられる「史記」は、司馬遷の創始による紀伝体で記された歴史書である。歴史的  
事件を記述していくうえで、時間的な記述の処理は最も基本的な問題だと捉えられる。

例えば、ある篇において、主要な事件を記述している途中で、同時進行的に他の場所で起きている事件を記述する際に、  
何らかの表現上の処理をする必要性が生ずる。

或いは、一つの事件が記述されたとするならば、その間に歴史的な時間経過はある程度進んでいることになる。そうし  
た場合、その既に記述した事件と同時期に起きた、他の事件を書き起こす際に、時間を遡って記述する必要性が生ずる。

また、ある事件が記述された後、次の新たな事件を書き起こす際に、時間が経過したことを示す必要性が生ずる。

このような、記述の際の時間表現が「史記」では如何にあらわれるかに着目して用例を抽出すると、多様な時間表現が  
確認できる。<sup>(注一)</sup>

以下、具体的な時間表現の用例を列挙する。

○同時期に起きた事件を書き起こすと捉えられるもの

・「當是時」 ・ 「當此時」 ・ 「當是之時」 ・ 「當此之時」 ・ 「當其時」 ・ 「是時」 ・ 「此時」 ・ 「其時」

○時間を遡ることを示すと捉えられるもの

・「始」 ・ 「初」

○事件と事件との時間経過を示すと捉えられるもの

・「久之」 ・ 「居久之」 ・ 「居頃之」 ・ 「有頃」 ・ 「頃之」 ・ 「居〇〇(概数)」

・「居〇〇(具体的な日、月、年数)」 ・ 「良久」

これらの用例は「史記」各篇にわたってほぼ満遍なく用いられているが、幾つかの用例に関しては特定の篇に偏在しているものがある。

そこで本稿では、「史記」において時間表現の用例が偏在している篇を取り上げ、篇の中で時間表現が如何に機能しているかを明らかにしていきたい。

## 二、「當是時」・「當此時」について

時間表現のうち、同時期に起きた事件を書き起こすと捉えられる語句として「當是時」・「當此時」という用例がある。本章では主にこれらの用例について考察を加える。

「史記」において「當是時」の用例は、全五十一例中六例が、また、「當此時」の用例は全九例中二例が「項羽本紀」にみられ、明らかに全体を通じてこれらの表現が頻出していると捉えることができる。<sup>(注)</sup>

そこで、以下具体的に「項羽本紀」での記述の順に、これら八つの用例を引用しつつ、その機能を検討をしていくこと

にする。<sup>(注三)</sup>

1 秦の二世元年七月に陳渉が秦朝打倒の挙兵をした後、項梁と項羽らもその動きに呼応するかのようには会稽で叛乱を起こした。その後、召平が陳王の命と偽り、項梁を楚王の上柱国に任命し、西進して秦を攻撃するように促した。そこでは、項梁が八千人を率いて江を渡ったことが記述され、続いて話題は陳嬰に移り、彼について、以下彼が東陽で二万人を得た後、母親の忠告を聞き入れ項梁に属す、というエピソードが挿入される。このような状況の下で次のようにある。

項梁渡淮。黥布・蒲將軍亦以兵屬焉。凡六七萬人、軍下邳。當是時、秦嘉已立景駒爲楚王、軍彭城東、欲距項梁。項梁謂軍吏曰、「陳王先首事、戰不利、未聞所在。今秦嘉倍陳王而立景駒。大逆無道。」乃進兵擊秦嘉。秦嘉軍敗走。追之至胡陵。嘉還戰。一日嘉死、軍降。景駒走死梁地。項梁已并秦嘉軍、軍胡陵、將引軍而西。(卷七 項羽本紀第七)

「當是時」の直前までは、六、七万人に膨れ上がった項梁軍が下邳に陣営を設けたことが記されている。「當是時」の直後からは新たに秦嘉という人物が登場させて話題を転換させている。

あくまでも読者の視点からいえば、「當是時」の語句によって、恰も映画のシーンが切り替わるかのような印象を受ける。それは、「當是時」の直前では項梁の率いる軍が下邳に陣営を設けた場面であるが、「當是時」の語句によってそのシーンは「秦嘉已立景駒爲楚王、軍彭城東、欲距項梁。」と、同時期に秦嘉が彭城に陣営を設けている状況が一つの場面として示されているからにはかならない。この記述に続いて、場面は「項梁謂軍吏曰」と、項梁の記事へと戻り、「當是時」の直前と同じ場面へと転換されている。そしてこの場面では、項梁が、陳王を裏切って景駒を擁立した秦嘉を非難し、秦嘉を攻撃するために進軍したことが記される。

2 項羽・沛公らと別行動をとっていた項梁は、定陶で章邯軍に攻撃され戦死した。このような戦況の下で次のように



ある。

章邯已破項梁軍。則以爲楚地兵不足憂。乃渡河擊趙、大破之。當此時、趙歇爲王、陳餘爲將、張耳爲相。皆走入鉅鹿城。章邯令王離・涉閒圍鉅鹿。章邯軍其南、築甬道而輸之粟。陳餘爲將、將卒數萬人、而軍鉅鹿之北。此所謂河北之軍也。(同前)

「當此時」の直前までは「章邯已破項梁軍。則以爲楚地兵不足憂。乃渡河擊趙、大破之。」と、章邯率いる軍が黄河を渡り趙を撃破した場面である。「當此時」の直後からは、趙歇・陳餘・張耳らが鉅鹿城へ敗走する場面へと転換し、その事態を承けて章邯が王離・涉閒らに鉅鹿城を包囲させた記事へと続いていく。「當此時」の語によって、読者からみれば、一瞬、それぞれ敗走する三人の姿が、次々とカメラワークによって切り替えられて映し出されるかのような印象を受ける。

3 一刻も早く鉅鹿城を包囲した秦軍を攻撃し趙王らを救援すべきだ、とする項羽の主張を上將軍の宋義は聞き入れない。それどころか、宋義は士卒が飢え凍えているというのに、齊の大臣として赴く息子である宋襄の送別の宴会を盛大に開いた。そのことに業を煮やした項羽が宋義を「社稷之臣」ではない、として斬る事件である。

項羽晨朝上將軍宋義。卽其帳中、斬宋義頭、出令軍中曰、「宋義與齊謀反楚。楚王陰令羽誅之。」當是時、諸將皆惛服、莫敢枝梧。皆曰、「首立楚者將軍家也。今將軍誅亂。」乃相與共立羽爲假上將軍、使人追宋義子。及之齊、殺之。使桓楚報命於懷王。懷王因使項羽爲上將軍。當陽君・蒲將軍皆屬項羽。(同前)

宋義の首を斬った後、項羽は部隊中に指令を出す。直後に「當是時」の語句が挿まれて、「諸將皆惛服、莫敢枝梧。皆曰、『首立楚者將軍家也。今將軍誅亂。』」と、諸將の様子と言葉が記されている。ここでの「當是時」の直前と直後においては、それぞれ陣営の中での出来事であることから、空間的には同一の場所である。また、項羽の言葉を承けた諸將に関する記述であることから、時間的には断絶なく、連続した時間の流れの中での出来事となっている。「當是時」の語句

により、読者にとって視覚的に想起される場面が印象的に切り替わっているのである。己の武力によって結果的には上將軍の地位を手に入れた猛々しい項羽の姿と、なすすべもなく、ただおろおろとして項羽の行為を認めざるを得なかった諸將の姿との対比が、「當是時」による一瞬の場面転換で強調されていると捉えることができる。

4 次の用例は、前出3に引用した記述の直後に続くものである。

項王已殺卿子冠軍、威震楚國、名聞諸侯。乃遣當陽君・蒲將軍、將卒二萬渡河、救鉅鹿。戰少利。陳餘復請兵項羽。乃悉引兵渡河。皆沈船破釜燒廬舍、持三日糧以示士卒必死、無一還心。於是至則圍王離、與秦軍遇、九戰、絕其甬道、大破之。殺蘇角、虜王離。涉間不降楚、自燒殺。當是時、楚兵冠諸侯。諸侯軍救鉅鹿下者十餘壁。莫敢縱兵。及楚擊秦、諸將皆從壁上觀。楚戰士無不一以當十。楚兵呼聲動天。諸侯軍無不人人懍恐。於是已破秦軍、項羽召見諸侯將。入轅門、無不膝行而前、莫敢仰視。項羽由是始爲諸侯上將軍。諸侯皆屬焉。(同前)

項羽は當陽君、蒲將軍らに二万人の兵を率いさせ、鉅鹿の救援に向かわせたが、あまり戦果を挙げることができなかった。そこで項羽は自ら全軍を率い、河を渡り鉅鹿に赴いた、という状況である。

「當是時」の直前までは、楚軍が王離の軍を包囲して秦軍と九度交戦し、甬道を絶ったこと、蘇角を殺し、王離を捕虜にし、楚軍に降伏しなかった涉間が自殺したこと、などといった具体的な戦果が記されている。「當是時」の直後からは、記述がこの時楚の兵が果たした活躍の話題に転じ、楚の兵の勇猛さが強調された後、その楚の兵の將としての項羽の立場が諸侯を恐れさせるに足るものであり、項羽がはじめて上將軍になったことが記される。

5 項羽の軍は新安で秦の降卒二十余万人を穴埋めにした後、秦の地を攻略しながら進軍し、函谷關に到着した。

行略定秦地、至函谷關。有兵守關、不得入。又聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使當陽君等擊關。項羽遂入、至于戲西。



沛公軍霸上、未得與項羽相見。沛公左司馬曹無傷、使人言於項羽曰、「沛公欲王關中、使子嬰爲相、珍寶盡有之。」項羽大怒曰、「旦日饗士卒、爲擊破沛公軍。」當是時、項羽兵四十萬、在新豐鴻門。沛公兵十萬、在霸上。范增說項羽曰、「沛公居山東時、貪於財貨、好美姬。今入關、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣、皆爲龍虎成五采。此天子氣也。急擊勿失。」(同前)

沛公が咸陽を破ったことを耳にした項羽は激怒し、當陽君らに函谷關を攻撃させ、關中に入った、という状況である。「當是時」の直前までは、曹無傷の言葉を聞き激怒した項羽の、「旦日饗士卒、爲擊破沛公軍。」という語が記されている。「當是時」の直後には、兩軍の規模、陣營の場所が示されている。そして、記述は「范增說項羽曰、」に始まる文へと続いていく。

この部分からは、両者の勢力、位置関係を、恰も俯瞰しているかのような印象を受ける。項羽が沛公を伐つ決意を表明し、それに対し范増が、取り逃がすことがないように、と畳みかける。そうした場面で、その時の項羽と沛公との兵力の比率が四対一であることが記され、項羽軍が圧倒的に有利な状況にいたることが示されている。さらに兩軍の陣營の場所も示されており、後に沛公が自分の陣營に逃げることで距離であったことが示唆される。そして記述は「項羽本紀」中盤の山場である、いわゆる「鴻門の會」へと進んでいく。

6 「鴻門の會」において身の危険を感じた沛公は、廁へ行くふりをして宴席を離れ外へ出た、という状況である。

沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。沛公曰、「今者出、未辭也。爲之柰何。」樊噲曰、「大行不顧細謹、大禮不辭小讓。如今人方爲刀俎、我爲魚肉。何辭爲。」於是遂去。乃令張良留謝。良問曰、「大王來何操。」曰、「我持白璧一雙、欲獻項王。玉斗一雙、欲與亞父。會其怒不敢獻。公爲我獻之。」張良曰、「謹諾。」當是時、項王軍在鴻門下。沛公軍在霸上。相去四十里。沛公則置車騎、脫身獨騎、與樊噲・夏侯嬰・靳彊・紀信等四人、持劍盾步走、從酈山下、道芷陽間行。沛

公謂張良曰、「從此道至吾軍不過二十里耳。度我至軍中、公乃入。」(同前)

沛公は樊噲の勧めもあり、項羽らに挨拶をせずに立ち去ることにした。

「當是時」の直前までは、沛公が持参した「白璧一雙」「玉斗一雙」を、張良に自分のかわりに献上してくれるよう依頼し、張良が承諾したことが記されている。「當是時」の直後では、両軍の陣營の地名とそれら互いの距離が示されている。

この部分からも両者の位置関係を俯瞰しているかのような印象を受ける。そして記述は「沛公則置車騎」に始まる文へと続いていくが、命を狙われている沛公はこの時敵陣の中にあり、身の安全が保障される自軍の陣營まで四十里であることが記され、5の用例と類似の表現で強調され、読者に緊張感を与える効果をもたらしていると言えよう。

7 漢王の四年、楚漢の攻防が激しさを増すなかで、漢王は韓信の部隊を手中に収めることができた。項羽は彼の軍の貯蔵食糧を焼いた彭越を敗走させ、漢王は廣武に進駐し、敖倉の食糧を手に入れた。このような状況の下で、次のようにある。

項王已定東海來西、與漢俱臨廣武而軍。相守數月。當此時、彭越數反梁地、絕楚糧食。項王患之、爲高俎、置太公其上、告漢王曰、「今不急下、吾烹太公。」漢王曰、「吾與項羽俱北面受命懷王。曰『約爲兄弟。』吾翁即若翁。必欲烹而翁。則幸分我一椀羹。」項王怒欲殺之。項伯曰、「天下事未可知。且爲天下者不顧家。雖殺之無益。祇益禍耳。」項王從之。

(同前)

「當此時」の直前までは、項羽が東海地方を平定した後西進し、漢と廣武山に臨んで布陣して数ヶ月対峙したまま、という場面である。「當此時」の直後からは新たに彭越が梁の地で叛き、楚の食糧補給を絶ったことが記されている。そして記述は「項王患之」と、そのような状況を憂慮した項羽がまな板の上に漢王の父太公をのせ、漢王とかけひきをする場



面へと続いていく。

ここでは「當此時」の語によって、項羽軍と漢王軍が対峙している場所から恰もカメラが切り替わり、彭越の、梁における行動のシーンだけが示された後、また再びもとの場面に戻っているかのような印象を受ける。やはりこの用例も、これまで確認してきた用例と同様に場面転換の機能を持つものといえよう。

8 韓信が河北の地を攻略し、楚を攻撃しようとしているとの情報を耳にした項羽は、龍且に命じて韓信を攻撃させた。韓信は龍且を殺し、自立して齊王を名乗った。この時、彭越が再び叛乱し、梁の地を攻略し、楚の食糧補給を絶った。そこで項羽は大司馬の海春侯曹咎らに成皋の守備を言いつけ、漢と交戦することのないように、と命じて自ら彭越を討つために十五日の期限を設けて梁の地へと赴いた。このような状況の下で次のようにある。

外黄不下數日。已降。項王怒、悉令男子年十五已上詣城東、欲阬之。外黄令舍人兒年十三。往説項王曰、「彭越彊劫外黄。外黄恐。故且降待大王。大王至、又皆阬之。百姓豈有歸心。從此以東梁地十餘城、皆恐莫肯下矣。」項王然其言、乃赦外黄當阬者。東至睢陽。聞之皆爭下項王。漢果數挑楚軍戰。楚軍不出。使人辱之五六日。大司馬怒渡兵汜水。士卒半渡、漢擊之、大破楚軍、盡得楚國貨賂。大司馬咎・長史翳・塞王欣、皆自剄汜水上。大司馬咎者、故斬獄掾、長史欣亦故櫟陽獄吏。兩人嘗有德於項梁。是以項王信任之。當是時、項王在睢陽。聞海春侯軍敗、則引兵還。漢軍方圍鍾離昧於滎陽東。項王至。漢軍畏楚、盡走險阻。(同前)

外黄攻略に思いの外手こずった項羽は外黄を下した後、怒って兵役年齢以上の者を悉く穴埋めにしようとする。ところが、「年十二」といういわば子供の勧告を受け容れ、穴埋めを中止してしまう。項羽が東方の睢陽に進軍すると、このことを聞いていた者は皆項羽に降伏した、とここまでは主に項羽の行動を中心にして記述が進められ、項羽が睢陽にいる場面で項羽に関する記述は止められている。続く記述では、項羽の留守を守る成皋城の場面に転じられている。



成臯城での楚軍は、項羽の命令通り漢軍が戦いを挑んできても出陣することはなかった。漢軍が楚軍を侮辱することが五、六日も続くと、大司馬の曹咎はとうとう腹を立て軍隊を出し結局大敗してしまう。

「當是時」の直前の記述では「大司馬咎者、故斬獄掾、長史欣亦故櫟陽獄吏。兩人嘗有德於項梁。是以項王信之。」と、曹咎と司馬欣らがかつて項梁に恩徳を施したことから項羽に信任されていたことが記されている。これはこの二人の人物に対する補足的説明であり、楚軍が漢軍に大敗し、「大司馬咎・長史翳・塞王欣、皆自劉沘水上。」と、曹咎、董翳、司馬欣らが自殺した所でこの場面の記述は止められている。「當是時」の直後からは、再び雎陽にいる項羽へと場面が転換され、項羽が兵を引き返すことが記され、それを承けた続く記述では成臯城の楚軍を破った漢軍が鍾離昧を滎陽の東で包囲し、項羽が来たことによってその漢軍が尽く逃亡してしまったことが記される。

この引用した部分において、項羽が外黄を攻略した後雎陽に進軍した場面から、成臯城への場面転換の際、文章表現上何の指標もみられない。それに対して成臯城で楚軍が大敗した場面から、雎陽にいる項羽軍の場面へは「當是時」の語句が用いられている。しかも項羽が雎陽にいることは、ほんの少し前に記述されているにもかかわらず、改めてまたここで記されている。「當是時」の語の前後で記されるのは、「項羽のいない」楚軍が破られたことであり、項羽が「是の時に當たり、まだ」雎陽にいたことである。読者にとっては、項羽軍がここに来て大きな痛手を被ったことを強く印象づけられる記述となっていると言えよう。

### 三、おわりに

以上のように「史記」における時間表現について、「當是時」「當此時」という二つの用例に限定し、これらの用例が頻出する「項羽本紀」での記述を中心にしてそのあらわれ方に考察を加えてきた。最後にこれらの表現の機能をまとめてお

きたい。

「項羽本紀」において用いられている「當是時」「當此時」の語は一言で言うならば「場面転換」の働きを持つと言える。これらの表現は、読者に、恰も映画のシーンが切り替わるかの印象を与えている。また、「當是時」「當此時」によって始まる部分は、その直後に続く部分において新たな話題が始まる指標となっている。

さて、「史記」の時間表現に関して、「項羽本紀」にみられる他の時間表現（「是時」：八例、「此時」：一例）との比較や、他の篇にも頻出する異なる時間表現の機能の解明とその比較（特に時間経過を示すものとしての「久之」については、全四十一例中「刺客列傳」：六例「張釋之馮唐列傳」：五例、と頻出している。）など、論ぜられるべき問題はまだまだ多く残されたままである。

これらの点については「史記」全体を通じたより詳細な分析が必要になると考えており、今後の課題としていきたい。

## 注

- 一、用例の抽出には「史記索引」（中国广播电视出版社 一九八九）を参考にした。
- 二、「當是時」について、次に多いのは「秦始皇本紀」「高祖本紀」「魏公子列傳」の三例。「當此時」については、「高祖本紀」「陳涉世家」に各二例みられる。
- 三、以下の用例は、瀧川龜太郎「史記會注考證」より引用した。